

<b>Title</b>	比較調音音声学から見たイギリス英語の音声的特徴
<b>Author(s)</b>	加曾利, 実
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢,18(3) : 31-50
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=71">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=71</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 比較調音音声学から見たイギリス英語の音声の特徴

加善利 実

## Phonetic Features of RP as Seen from the Standpoint of Comparative Articulatory Phonetics

Minoru KASORI

This paper analyzes the sound structure of British English from the standpoint of comparative articulatory phonetics, comparing RP (Received Pronunciation) with GAS (General American Speech). It is influenced by lectures heard at University College London (UCL) and the ideas of the International Phonetics Association (IPA), in particular the ideas of Daniel Jones. The cultural diversity of British culture has also formed this paper.

---

**Key words:** Received Pronunciation, Articulatory Phonetics, Narrow Transcription, Segmental Phoneme, Suprasegmental Phoneme

### 目 次

- |                        |                             |
|------------------------|-----------------------------|
| ・日本近代史におけるイギリスという国について | ・世界の主要なる英語使用国の英語状況<br>・終わりに |
| ・英米両言語の音声表記の異同および調音的特徴 | 注<br>参考文献                   |
| ・イギリス英語の音声の特徴概観        | 英米音声記号対照表                   |

.....

### ・日本近代史におけるイギリスという国について

現代日本人は、「イギリス」という国にどのようなイメージを抱いているであろうか。近年の「指輪物語」や「ハリー・ポッター」などのファンタジー系の小説や映画を通して、以前より、よいイメージを持つ人が増えたように思う。20-30年ほど前には、「イギリス」というと、アメリカと比較

した場合、英文学を専攻するなどの一部の人を除いて、それほど特別魅力的な社会という認識は無かったように思われる。私の学生時代の、世間一般の風潮が、アメリカ英語中心であったせいもあるかも知れない。しかし、今回、イギリスに留学して、これが誤った認識であったことに気づくのに、さほど時間はかからなかった。魅力が無いどころか、これほどの魅力に溢れた国も珍しいのではないかとさえ思うようになった。ワーズワースで有名な湖水地方やコッツウォルズなどを始めとする、風土の美しさだけではなかった。食事も聞いていたのとは異なり、むしろ美味と呼べる食べ物に至る所にあった。やはり百聞は一見にしかずの諺通りであった。

今回の留学で発見したことで、とりわけ重要なことは、イギリスという国家が、日本の近代史、特に「明治維新」と深く関わっていたことである。否、関わっていたというところではない。日本の近代化に大きく貢献した欧米諸国（イギリス、フランス、ドイツなど）の中で、最も中核を成した国は、イギリスであり、まさにイギリスという国家は、日本にとって、その近代化に多大なる貢献があったのである。

日本では、あまり知られていないようであるが、ロンドン大学（University College London）は、日本開国の明治維新の頃、伊藤博文（1863年藩留学生として井上馨とともに渡英、後に初代総理大臣となる）、井上馨、森有礼、外山正一などが留学した大学で、政治・科学技術を中心とした、日本の近代化に大きく貢献した大学である<sup>(1)</sup>。逆に言うと、彼らの渡英（ロンドン大学留学）が無ければ、日本の近代化も無かったことになる。近代化が遅れることは、引いては、日本が欧州列強の植民地と化してしまう可能性もあったことを意味する。

今回、留学の榮に浴すことができたロンドン大学大学院の「音声学・言語学学部」(The Department of Phonetics and Linguistics)には、長い歴史があり、電話機の発明で有名な Alexander Graham Bell 教授や近代音声学の祖と呼ばれる Daniel Jones 教授が教鞭をとっている。特に、Jones 教授は世界で始めて「一般音声学」の講義を開始し、また音声学の国際的最高権威機関である The International Phonetic Association (IPA) の礎を築いたことでも知られる<sup>(2)</sup>。その榮えある歴史は、John C. Wells 教授の他、Michael Ashby, Jill House, John Maidment, Jane Setter, Mark Huckvale 等の優れた教授陣に現在まで引き継がれている。本論文は、その留学研究成果の一つである<sup>(3)</sup>。

## ・英米両言語の音声表記の異同および調音的特徴

研究方法・手順としては、イギリス英語について、アメリカ英語との比較において、特に音声表記および調音的特徴の異同について分析を行うこととする<sup>(4)</sup>。それと言うのも、単にイギリス英語の音性的特徴を述べるだけでは、その特徴を十全に把握することはできないと考察するからである。各言語の標準語とされる変種・形態を比較分析する。その際、The General American Speech を a とし、Received Pronunciation, 即ち The Southern British English (centering in London) を b とする

こととする。個々の音声毎に，英米両言語の音声定義，音声記号の異同，音価の異同の三点について調べていくこととする。従って，今回は，segmental phonemes を中心に論述する。

米国の音声学者の中には，「アメリカ英語における長母音の示差的特徴」を否定する学者もいるようであるが<sup>(5)</sup>，ここでは一般的な見解から，長母音の表記を用いることとする。この問題については，いずれ詳細に検討する必要があると思われる。尚，本論文で扱うイギリス英語は，その標準語である Received Pronunciation (RP)，またアメリカ英語については，その標準語の General American Speech (GAS) とする<sup>(6)</sup>。

### 英米各言語の使用記号と音価の異同：

#### A . 母音 (Vowels)

1 a .[ iː ] High-front Unrounded Tense Long Vowel 高前舌非円唇緊張長母音

1 b .[ iː ] High-front Unrounded Tense Long Vowel 高前舌非円唇緊張長母音

記号：同一の記号を使用し，lower-case I [ i ] の後に length mark [ ː ] を付けて表記する。

音価：ほぼ同一の音声である。

2 a .[ i ] High-front Unrounded Lax Short Vowel 高前舌非円唇弛緩短母音

2 b .[ I ] High-front Unrounded Lax Short Vowel 高前舌非円唇弛緩短母音

記号：米音が，lower-case I [ i ] を使用するのに対して，英音は，small capital I [ I ] を用いる。

音価：ほぼ同一の音声である。

3 a .[ ε ] Mid-front Unrounded Lax Short Vowel 中前舌非円唇弛緩短母音

3 b .[ e ] Mid-front Unrounded Tense Short Vowel 中前舌非円唇緊張短母音

記号：米音が，epsilon [ ε ] を使用するのに対して，英音は，lower-case e [ e ] を用いる。

音価：英音の方が，米音よりも開口度が狭いので，日本人の耳には，やや [ I ] に近く聞こえる場合もある。

4 a .[ æ ] Low-front Unrounded Short Vowel 低前舌非円唇短母音

4 b .[ æ ] Low-front Unrounded Short Vowel 低前舌非円唇短母音

記号：同一の記号 ash [ æ ] を使用する。

音価：ほぼ同一の音声である。

比較調音音声学から見たイギリス英語の音声の特徴

5 a .[ ə ] Mid-central Unrounded Lax Short Vowel 中中舌非円唇弛緩短母音

5 b .[ ə ] Mid-central Unrounded Lax Short Vowel 中中舌非円唇弛緩短母音

記号：同一の記号を使用する。これは、一般的に schwa と呼ばれる。

音価：ほぼ同一の音声である。

6 a .[ ʌ ] Mid-central Unrounded Tense Short Vowel 中中舌非円唇緊張短母音

6 b .[ ʌ ] Mid-central Unrounded Tense Short Vowel 中中舌非円唇緊張短母音

記号：同一の記号を使用する。これは、turned v または inverted v と呼ばれる。

音価：ほぼ同一の音声である。

7 a .[ aː ] Low-back Unrounded Long Vowel 低後舌非円唇長母音

7 b .[ aː ] Low-back Unrounded Long Vowel 低後舌非円唇長母音

記号：同一の記号を用い、script a [ a ] の後に length mark [ : ] を付けて表記する。

音価：ほぼ同一の音声である。

8 a .[ ʌ ] Low-back Unrounded Short Vowel 低後舌非円唇短母音

8 b .[ ɐ ] Low-back Rounded Short Vowel 低後舌円唇短母音

記号：例えば、pot の場合、米音が、script a [ a ] を使用するのに対して、英音は、turned script a [ ɐ ] を用いる。以前、英音には、open o [ ɔ ] の記号を用いていたが、現在では、一般的に、[ ɐ ] の方を用いる。

音価：[ a ] が Unrounded であるのに対して、[ ɐ ] は Rounded である。[ a ] も [ ɐ ] も、日本人にとって発音が難しい音声であるが、特に発音困難な音声は、[ a ] ではなく、[ ɐ ] の方である。[ a ] は、口を大きく開けて、喉の奥から「ア」と言えば、近い音がでるが、[ ɐ ] は、「口を開けると同時に、唇を少しすぼめる」という、日本人にとっては、曲芸に近い発音をしなければならないのである。曲芸に近いと言ったのは、日本語には、欧米の諸言語音のように「口を広く開けて出す母音」も、また「唇をすぼめることによって出す母音」も無いからである。正確に発音できるようにするためには、ある程度の練習が必要である。逆に、日本語の母音の特徴が、この両母音によって判明するとも言える。日本語の母音の特徴は、「開口度が狭く、かつ非円唇音」とであると考察できる。欧米の円唇母音と比較すると、通常、日本語では円唇母音と考えられている「ウ」や「オ」でさえも、実際の発音観察から得られる結果として、「非円唇母音」と定義せざるを得ないのである。

9 a .[ uː ] High-back Rounded Tense Long Vowel 高後舌円唇緊張長母音

9 b .[ uː ] High-back Rounded Tense Long Vowel 高後舌円唇緊張長母音

記号：同一の記号を使用する。lower-case U [ u ] の後に length mark [ ː ] を付けて表記する。

音価：ほぼ同一の音声である。

10 a .[ ʊ ] High-back Rounded Lax Short Vowel 高後舌円唇弛緩短母音

10 b .[ ʊ ] High-back Rounded Lax Short Vowel 高後舌円唇弛緩短母音

記号：米音が , lower-case U [ u ] を使用するのに対して , 英音は , upsilon [ ʊ ] を用いる。

音価：ほぼ同一の音声である。

11 a .[ ɔː ] Low-back Rounded Long Vowel 低後舌円唇長母音

11 b .[ ɔː ] Low-back Rounded Long Vowel 低後舌円唇長母音

記号：同一の記号を使用する。Open O [ ɔ ] の後に length mark [ ː ] を付けて表記する。

音価：ほぼ同一の音声である。英音の方が , more rounded のように思われる。

12 a .[ ɔ ] Low-back Rounded Short Vowel 低後舌円唇短母音

12 b .[ ɔ ] Low-back Rounded Short Vowel 低後舌円唇短母音

記号：現在のところ , 英米両言語共に , この記号は使用しない。8 の記号 [ a ] [ e ] を用いる。

音価：今日では , 原則として , 英米共に , この音声は長音 [ ɔː ] のみで , [ ɔ ] の記号を使用しない辞書が増えてきている。

13 a .[ əːr ] Mid-central Unrounded Retroflex Long Vowel 中中舌非円唇反転長母音

13 b .[ əː ] Mid-central Unrounded Long Vowel 中中舌非円唇長母音

記号：米音が , [ əːr ] を使用するのに対して , 英音は , [ əː ] を用いる。つまり , 英音は 5 [ ə ] の長母音ということになる。もっとも , 米音であっても , r 音が語中に無ければ , 英音と同音の [ əː ] となる。

音価：米音で r 音が生ずれば , 反転音となるが , 英音では , 5 b [ ə ] の長母音のみである。

14 a .[ aːr ] Low-back Unrounded Retroflex Long Vowel 低後舌非円唇反転長母音

14 b .[ aː ] Low-back Unrounded Long Vowel 低後舌非円唇長母音

記号：米音が , [ aːr ] を使用するのに対して , 英音は , [ aː ] を用いる。もっとも , 米音であっても , r 音が語中に無ければ , 英音と同音の [ aː ] になる。

比較調音音声学から見たイギリス英語の音声的特徴

音価：米音で r 音が生ずれば，反転音となるが，英音では，絶えず 7 b [ a: ] の音である。

15 a . [ ɔ: r ] Low-back Rounded Retroflex Long Vowel 低後舌円唇反転長母音

15 b . [ ɔ: ] Low-back Rounded Long Vowel 低後舌円唇長母音

記号：米音が，[ ɔ: r ] を使用するのに対して，英音は，[ ɔ: ] を用いる。米音であっても，r 音が語中に無ければ，英音と同じ [ ɔ: ] (例：bought) となる。

音価：米音で r 音が生ずれば，反転音となるが，英音では，11b [ ɔ: ] と同じ長母音である。

B . 二重母音 ( Diphthongs )

上昇二重母音

1 a . [ ei ]

1 b . [ eɪ ]

記号：米音が，音節副音的母音に，[ i ] を使用するのに対して，英音は，[ ɪ ] を用いている。

音価：ほぼ同一の音声である。

1 a . [ ai ]

1 b . [ aɪ ]

記号：米音が，音節副音的母音に，[ i ] を使用するのに対して，英音は，[ ɪ ] を用いている。

音価：ほぼ同一の音声である。

3 . [ ɔ i ]

3 . [ ɔɪ ]

記号：米音が，音節副音的母音に，[ i ] を使用するのに対して，英音は，[ ɪ ] を用いている。

音価：ほぼ同一の音声である。

4 . [ au ]

4 . [ aʊ ]

記号：米音が，音節副音的母音に [ u ] を使用するのに対して，英音は，[ ʊ ] を用いる。

音価：ほぼ同一の音声である。

5 . [ ou ]

5 . [ əʊ ]

記号：英米で、全く記号が異なる。米音が、[ ou ]を使用するのに対して、英音は、[ əʊ ]を用いる。

音価：この[ əʊ ]が、イギリス音声らしさを醸し出す一因となっていることに間違いない。一般的に、日本では、あまり知られていない音声で、米音の [ ou ]と同じ音声と誤っている人が多い。「アウ」というところまでは行かないが、その音に少し似た響きがある。

#### 集中二重母音

6. [ iɔ(r) ]

6. [ iə ]

記号：米音が、音節主音的母音に [ i ]を使用するのに対して、英音は、[ ɪ ]を用いる。米音では [ iər ]を [ ir ]と表記して、[ ə ]を省く表記法もある。この場合、[ r ]の中に [ ə ]が含まれているものとする。

音価：ほぼ同一の音声である。しかし、米音では、後に r が存在する場合、その部分が retroflex vowel [ ər ]となる。

7. [ ɛər ]

7. [ eə ]

記号：米音が、音節主音的母音に [ ɛ ]を使用するのに対して、英音は、[ e ]を用いる。米音では [ ɛər ]を [ er ]と表記して、[ ə ]を省く表記法もある。

音価：ほぼ同一の音声である。米音では、後ろの部分が retroflex vowel [ ər ]となる。

8. [ uɔ(r) ]

8. [ ʊə ]

記号：米音が、音節主音的母音に [ u ]を使用するのに対して、英語は、[ ʊ ]を用いる。また、poor のように [ pʊə ]の他に [ puː ]という発音もある。他方、米音では、[ uər ]を [ ur ]と表記して、[ ə ]を省いたり、また [ uə ]と表記して、retroflex schwa [ ə ]を用いる表記法もある。

音価：ほぼ同一の音声である。しかし、米音では、後に r が存在する場合、その部分が retroflex vowel [ ər ]となる。

9. [ ɔər ]

9. [ ɔː ]

記号：米音が、[ ɔər ]と二重反転母音になるのに対して、英音は、[ ɔː ]と長母音化するこ

## 比較調音音声学から見たイギリス英語の音声の特徴

とが多い。米音では, [ ɔər ] を [ ɔr ] と表記して, [ ə ] を省く表記法もある。

音価：ほぼ同一の音声である。

### C . 子音 (Consonants)

子音については, 英米両言語が使用する音声記号に差異はない。従って, 音声定義は, 母音と異なり, 一つだけとする。しかし, 音価のこととなると, 微妙に異なってくる。従って, 子音については, 音価を中心に, その異同を分析することとする。

#### 1 . [ p ] Voiceless Bilabial Plosive 無声両唇破裂音

記号：同一の記号を使用する。

音価：ほぼ同一の音声である。以前の論文で述べたように, 英米共に「唇全体の筋肉」を用いる<sup>(7)</sup>。日本語のように, 「唇の前方一部の筋肉のみ」を使う音声ではない。英音の破裂音は, 米音のそれと比較すると, 全体的に帯気音 [ <sup>h</sup> ] (aspiration) になる傾向が見受けられる。

#### 2 . [ b ] Voiced Bilabial Plosive 有声両唇破裂音

記号：同一の記号を使用する。

音価：1と同様に, ほぼ同一の音声である。

#### 3 . [ t ] Voiceless Alveolar Plosive 無声歯茎破裂音

記号：同一の記号を使用する。

音価：この音声については, 色々と問題がある。米音の t は, 語頭・語中・語尾などの環境によって変化する。即ち, 米音の t には, 次の5種類の場合が考えられる<sup>(8)</sup>。( ) 内に例単語を挙げておく。ただし, 語尾では, 語中の t [ t ] が使われる場合もある。

1) 語頭: aspirated t            [ t<sup>h</sup> ] 帯気音または有気音の t ( tent )

2) 語中: unaspirated t        [ t ] 無気音の t ( stand )

3) 語尾: voiceless stop t    [ tʔ ] 無破裂音の t ( cat )

4) 'th' の前: dentalized t    [ t̪ ] 歯音の t ( at that time )

5) 母音間: intervocalic t    [ t̩ ] 母音間の t または有気音の t ( letter )

これに対して, 英音の t 音は, 語頭のみならず, 語中, 母音間においては, 常に無声歯茎帯気(ま

たは有気)破裂音である。英音で中心となる t は, voiceless alveolar aspirated plosive と言うことができる。つまり, 米音の5種類に対して, 英音には, 次の3( ~ 4)種類しかないと考察できる。

- 1) 語頭・語中・母音間: aspirated t [ t<sup>h</sup> ]
- 2) 語尾: voiceless stop t [ t<sup>ʔ</sup> ] または [ t ]
- 3) 'th' の前: dentalized t [ t̪ ]

例えば, water という単語は, 米音では [ wɑtə ] となり, t が intervocalic t になるが, 英音では [ wɛt<sup>h</sup>ə ] と, aspirated t になる。この無声歯茎帯気破裂音 [ t<sup>h</sup> ] の音声も, 二重母音の [ əʊ ] 同様に, 「英音らしさ (English Accent)」を構成する, イギリス英語の音声特徴の一つとして数えることができると思われる。

#### 4. [ d ] Voiced Alveolar Plosive 有声歯茎破裂音

記号: 同一の記号を使用する。

音価: ほぼ同一の音声である。有声音であるため, 帯気音 [ h ] が [ d ] の音声自体に内包されている。

#### 5. [ k ] Voiceless Velar Plosive 無声軟口蓋破裂音

記号: 同一の記号を使用する。

音価: ほぼ同一の音声である。本論文の英米音声比較という論旨から少し離れてしまうが, [ k ] と関連して, 一言だけ述べておきたいことがある。それは, 日本語の「カ行」についてである。日本語の「カ行」は, 硬口蓋と軟口蓋の境目と中舌のやや後部との接触・破裂で調音されるのに対して, 英語の [ k ] は, 軟口蓋のやや後部に後舌と接触・破裂で調音される。日本語の「カ行」を精密表記すると, [ k ] ではなく, [ c ] と表記すべきであるように思われる。Voiceless Palatal Retracted Plosive 即ち, 無声硬口蓋後寄り破裂音と定義できる。本来, Retracted (後寄り) [ \_ ] という用語は, 母音に用いるものであるが, この用語を子音に使ったのは, もしこの用語がなければ, Voiceless Palatal Plosive [ c ] になってしまうからである。この [ c ] という音声は, 実は, 「カ行」の音ではなく, palatalization のために, 「kja」の音に近く発音され, このままでは, 実際の日本語の「カ行」というよりも「キャ行」の音に近く, 異なる音価を有する。しかし, 日本語の「カ行」は, [ k ] よりも, どちらかと言うと, 調音点が [ c ] に近く, 「口腔前寄りの音声」なので, [ c ] に内包されている [ j ] の音成分を取り除く

## 比較調音声学から見たイギリス英語の音声的特徴

(depalatalization: 非硬口蓋音化) という意味で, [ç] と表記するのが妥当と考える。

### 6. [g] Voiced Velar Plosive 有声軟口蓋破裂音

記号：同一の記号を使用する。

音価：ほぼ同一の音声である。上と同じ理論に従えば, 日本語の「ガ行」は, [ɣ] に [ç] を加えて, [ɣç] と表記できる。有声音であるため, 帯気音 [h] が [ɣç] の音声自体に内包されている。

### 7. [f] Voiceless Labio-dental Fricative 無声唇歯摩擦音

記号：同一の記号を使用する。

音価：ほぼ同一の音声である。下唇のやや内側に上歯を当てるようにして, 歯と歯の間隙から息を出す。中には, 前歯を少しむき出し気味に発音する人も多少いるようであるが, 下唇のやや内側の方が, 一般的である。

### 8. [v] Voiced Labio-dental Fricative 有声唇歯摩擦音

記号：同一の記号を使用する。

音価：ほぼ同一の音声である。息と声を出す。

### 9. [θ] Voiceless Dental Fricative 無声歯摩擦音

記号：同一の記号を使用する。

音価：この [θ] という音声の発音方法については, 諸説がある。UCL 留学中, イギリス人のある音声学者は, 米音の [θ] は, 「上下の前歯(門歯)で舌先を軽く噛む様にして発音する調音方法」が, 一般的であるが, 英音は, 「上前歯の裏に舌先を付けて発音し, 下前歯で舌の裏側を支えることは無いとする調音方法」であると説明した。しかし, 別のイギリス人の音声学者は, 英音は, 「上前歯の裏に舌先を付けて発音すると同時に, 舌の裏側を下前歯によって支えることが必要な調音方法」であると説明した。私は, 後者の考えの方が, 現実的で, 説得力があると考察する。英音にも米音同様に, 「舌の裏側を下前歯によって支えることが必要である」と考えている。何故ならば, もし下前歯で支えなければ, [θ] を発音することなどできないのである。[θ] の調音特徴を考えれば, この事実を認識・理解することは, 至極容易である。この [θ] という音声は, 以前の論文で述べたように, 「舌先と上前歯を接触することにより, 息の出口を遮断して, 息を歯隙から放出した結果出る音声」であり, 息の出口を遮断するためには, 必ず下前歯が舌の裏側を支えてなければならないのである<sup>(9)</sup>。

上記のことと関連して、英語がヨーロッパの言語の一つであることを思い出される事実がある。実は、この「舌先を上前歯の裏に付けて発音する [ θ ] は、ギリシャ語の [ θ ] の調音方法」でもあるのである。しかし、ギリシャ語の [ θ ] は、「上前歯の裏に舌先を当てて、下前歯で舌の裏を支えて」発音されるのである。恐らく、英語の [ θ ] は、ほぼギリシャ語の [ θ ] に近い調音方法で発音されることであろう。では、何故、「下前歯の支えがない」などと調音方法を誤認するのであろうか。これは、認識上の問題であるように思う。それほど母語の調音は、native speaker にとっても、正しい認識が困難なものなのである。むしろ native tongue であるからこそ、自分が、各音声をどのように発音しているのか、正しく認識することが困難なことから生ずる言語現象であると思われる。

10 . [ ð ] Voiced Dental Fricative 有声歯摩擦音

記号：同一の記号を使用する。

音価：有声音であること以外は、9と同一の特徴がある。

11 . [ s ] Voiceless Alveolar Fricative 無声歯茎摩擦音

記号：同一の記号を使用する。

音価：これも [ θ ] と同様に、英音には、二つの発音方法がある<sup>(10)</sup>。「米音同様に、舌先を歯茎に向けて、摩擦音を出す方法」と、「日本語の「サ」音のように、舌先を下前歯の裏に当て、舌尖と上歯茎との隙間から息を出す方法」である。音価的には、同じなので、どちらを用いても大差は無いが、一般的に、英音は、の調音方法を用いる傾向が強いように思われる。ただし、「サシスセソ」ではなく、「サァ スィ スゥ セエ ソォ」のような音になる。これは、日本語の「サ行」(特に「シ」の音)が、「舌葉部と上歯茎との隙間から息を出す」のに対して、英音は、上記したように、「舌尖と上歯茎との隙間から息を出す」という違いから生ずるものである。

12 . [ z ] Voiced Alveolar Fricative 有声歯茎摩擦音

記号：同一の記号を使用する。

音価：ほぼ同一の音声である。有声音であること以外は、11と同じ。

13 . [ ʃ ] Voiceless Alveopalatal Fricative 無声歯茎・硬口蓋摩擦音

記号：同一の記号を使用する。

音価：ほぼ同一の音声である。

14 . [ ɹ ] Voiced Alveopalatal Fricative 有声歯茎・硬口蓋摩擦音

記号：同一の記号を使用する。

音価：ほぼ同一の音声である。有声音であること以外は、13と同じ。

15 . [ h ] Voiceless Glottal Fricative 無声声門摩擦音

記号：同一の記号を使用する。

音価：ほぼ同一の音声である。

16 . [ r ] Voiced Post-alveolar Retroflex 有声後歯茎反転音

記号：英米共に、[ r ] という同一の記号を使用しているのであるが、この記号表記には、大きな問題がある。IPA のホームページ( <http://www2.arts.gla.ac.uk/IPA/ipa.html> ) から IPA Chart をダウンロードすることができる。このチャートを見て、奇妙なことに気づく。一般的に良く用いられている [ r ] の記号が、実際には、現実に用いられている音声である Voiced Alveolar Approximant [ ɹ ] ( 英の r 音声 ) や Voiced Retroflex Approximant [ ɻ ] ( 米の r 音声 ) ではないという事実である。IPA の記号では、通常、[ r ] は、スペイン語やイタリア語にある Voiced Alveolar Trill を表記するための記号なのである。それを流用しているのである。[ r ] 関連の音声として、世界の言語には、下記の 8 種類が存在する<sup>(1)</sup>。( ) に例を挙げる。

- 1 ) [ r ] Voiced Dental or Alveolar Trill ( スペイン語の顫動音 r )
- 2 ) [ ɾ ] Voiced Dental or Alveolar Tap or Flap ( 日本語の歯茎弾音 r )
- 3 ) [ ɽ ] Voiced Post-alveolar or Retroflex Tap or Flap ( ヒンディー語の反転弾音 r )
- 4 ) [ ɻ ] Voiced Post-alveolar or Retroflex Approximant ( 米語の反転接近音 r )
- 5 ) [ ɹ ] Voiced Dental or Alveolar Approximant ( 英語の歯茎接近音 r )
- 6 ) [ R ] Voiced Uvular Trill ( フランス語方言の口蓋垂顫動音 r )
- 7 ) [ ʀ ] Voiced Uvular Fricative ( フランス語 ( パリ ) の口蓋垂摩擦音 r )
- 8 ) [ ɽ ] Voiced Dental or Alveolar Lateral Flap ( ツワナ語の歯茎側音弾音 r )

本論文に関係する r は、4 と 5 である。イギリス英語の r を厳密に定義すると、Voiced Dental or Alveolar Approximant [ ɹ ] ということになる。これを fricative と定義する音声学者もいるが、Approximant という定義の方が、適切であろう。尚、弾音を打音と呼ぶこともある。この r 音の諸説については、またの機会に詳述したいと考えている。

音価：聞こえとしては、英米共に、ほぼ同一の音声である。尚、米語の音声の中には、上記の

Voiced Post-alveolar or Retroflex Approximant [ ɻ ] の他に, Voiced Dorsal Approximant ( 有声舌背接近音 ) がある。むしろ, こちらの音声の方が, 米語 ( GAS ) では普通に良く聞かれる音声である。

17 . [ tʃ ] Voiceless Alveopalatal Affricate 無声歯茎・硬口蓋破擦音

記号 : 同一の記号を使用する。

音価 : ほぼ同一の音声である。

18 . [ dʒ ] Voiced Alveopalatal Affricate 有声歯茎・硬口蓋破擦音

記号 : 同一の記号を使用する。

音価 : ほぼ同一の音声である。有声音であること以外は, 17と同じ。

19 . [ ts ] Voiceless Alveolar Affricate 無声歯茎破擦音

記号 : 同一の記号を使用する。

音価 : ほぼ同一の音声である。

20 . [ dz ] Voiced Alveolar Affricate 有声歯茎破擦音

記号 : 同一の記号を使用する。

音価 : ほぼ同一の音声である。有声音であること以外は, 19と同じ。

21 . [ l ] Voiced Alveolar Lateral 有声歯茎側音

記号 : 同一の記号を使用する。

音価 : ほぼ同一の音声である。[ l ] については, [ r ] との関連から, いずれの機会に総合的な分析を試みねばならないと考えている。

22 . [ m ] Voiced Bilabial Nasal 有声両唇鼻音

記号 : 同一の記号を使用する。

音価 : ほぼ同一の音声である。

23 . [ n ] Voiced Alveolar Nasal 有声歯茎鼻音

記号 : 同一の記号を使用する。

音価 : ほぼ同一の音声である。

24 . [ ŋ ] Voiced Velar Nasal 有聲軟口蓋鼻音

記号：同一の記号を使用する。

音価：ほぼ同一の音声である。

25 . [ j ] Voiced Palatal Semivowel 有聲硬口蓋半母音

記号：同一の記号を使用する。

音価：ほぼ同一の音声である。現在でも，Semivowel(半母音)という学術用語は，用いられているが，近年は，Ladefoged が使い始めた Approximant という用語の方が，良く用いられるようになってきた。フランス語では，これを半子音と呼ぶが，興味深いことである。

26 . [ w ] Voiced Labiovelar Semivowel 有聲両唇軟口蓋半母音

記号：同一の記号を使用する。

音価：ほぼ同一の音声である。用語については，25 [ j ] と同じ。

## ．イギリス英語の音声的特徴概観

以上のように，詳細にイギリス英語の調音的特徴を見てくると，気が付くことがある。しかし，その前に，日本人がイギリス英語に抱いているイメージについて触れておきたい。一般的に，日本人がイギリス英語について持っているイメージは，「イギリス英語の発音は，アメリカ英語と比べると，綴り字通り発音されるので，比較的容易である」というものである。しかし，これは，事実であろうか。前章を読めば，この真偽は定かである。だが，確かに日本人にとって，イギリス英語の方が，アメリカ英語よりも多少聞き易く感じる傾向はあるので，発音が容易であると勘違いしてしまっても致し方の無い面もある。

前章の要点をまとめると，イギリス英語の音声的特徴として，主だったものには，次のようなものがあることが判明する。米音との差異を述べることにする。母音・二重母音・子音の順番で箇条書きして，その音声変化傾向をみることにする。

- 1 . 米音では，[ a ] は，英音では，[ ɛ ] となる。例えば，box [ baks ] は，[ bɛks ] になる。
- 2 . 米音では，[ æ ] は，英音では，[ aː ] となる。例えば，can't [ kænt ] は，[ kaːnt ] になる。
- 3 . 米音では，[ ou ] は，英音では，[ əʊ ] となる。例えば，road [ roud ] は，[ rəʊd ] になる。

4. 米音では, [ɛər] が, 英音では, [ə] となることがある。例えば, there [ðɛər] は, [ðə] と発音されることがある。即ち, there is は, [ðɛəɪz] ではなく, [ðəɪz] となる。
5. 米音では, [uər] は, 英音では, [ɜː] となる。例えば, surf [ʃuər] でなく, [ʃɜː] となる。
6. 米音では, [t̩] は, 英音では, [tʰ] となる。例えば, better [bet̩ər] は, [betʰə] になる。私の知る限り, この音声現象について触れている書籍を知らない。新しい発見であった。
7. アメリカ英語では, car [kaːr] などの単語では, 母音の後に r が生ずるが, イギリス英語の場合, r-linking を除いて, 原則的に r が生ずることはない。即ち, car [kaː] となる。これを r-dropping という。

これ以外にも, 第二強勢の弱化, イントネーションの差異などの suprasegmental phoneme の面までイギリス英語の問題点を掘り下げていったら, 枚挙に遑が無い。Estuary English の台頭も, 著名な音声学者が大きな問題として取り上げていることは, 周知の事実である。このことも今後の研究課題としたい。

### ・世界の主要なる英語使用国の英語状況

世界における英語の代表として, イギリス英語とアメリカ英語は, 音声・語彙・表現などについて見ると, 両者の間には, 大分隔たりがあるが, 結果的には, その基盤が共通しているので, コミュニケーション上, 理解に困難があることは殆ど無い。このようにして, この両言語を中心として, 世界における英語の使用状況を概観すると, 主として, 次のような7種類に分類が可能になると思われる<sup>12)</sup>。

1. イギリス英語
2. アメリカ英語 (黒人英語も含む)
3. カナダ英語
4. オーストラリア (ニュージーランド英語も含む)
5. シンガポール英語 (マレーシア英語, フィリピン英語も含む)
6. インド英語 (アフリカ英語も含む)
7. ビジン・クリオール英語

## 比較調音音声学から見たイギリス英語の音声的特徴

しかし、この一見複雑そうな音声言語体系も、イギリス英語とアメリカ英語という図式で概観すると、意外にも、単純な「実態」が見えてくるのである。Eを「イギリス英語の音声」、Aを「アメリカ英語の音声」、を「その土地における諸文化・諸事情」とすると、次のように公式化できる<sup>13)</sup>。

		音声の構成要素
1. イギリス英語	-----	E
2. アメリカ英語	-----	A
3. カナダ英語	-----	A +
4. オーストラリア英語	-----	E +
5. シンガポール英語	-----	E +
6. インド英語	-----	E +
7. ピジン・クリオール英語	-----	E +

以上の結果を踏まえると、ここに新たな概念が生まれる可能性が出てくる。それは、Core English (核英語) という概念である。この概念を用いると、世界の英語状況を次のように定義できる。

世界における種々な英語 = Core English +

ここで確認しておかねばならないことがある。それは、結論的には、日本人が、モデルとすべき英語は、所謂「世界各地の World English」<sup>14)</sup>ではなく、やはり伝統的な自然言語であるイギリス英語ないしアメリカ英語の音声を中心に学習することが正道であろうということである。この学習には、文化という大きなメリットがある。言語と文化は切り離せない存在である。

## ・終わりに

生まれて初めてロンドンの地下鉄に乗ったときの印象は、遡ること10年以上前にアメリカへ行ったときに受けたカルチャー・ショックではなく、むしろ何か故郷へ帰ってきたような懐かしさであった。これは、後で分かるのであるが、「日本の近代文化の礎がイギリスから来た」ことに由来するものであろう。伊藤博文、井上馨などといった近代明治維新の偉人たちが、江戸末期に、イギリスの、このロンドン大学へ来ていたことなど知る由も無かった。

半年間、ロンドン大学に学んで得られたことは、「やはり IPA は偉大であった」という点に尽きると言える。むしろ、ダニエル・ジョーンズの偉大さに触れたといえる。更にいえば、イギリス文

化の多様性・偉大さに触れたともいえる。また、日本史上、イギリスの重要性を感じた。

本論文は、既述したように、聖学院大学特別研究制度に基づき、2003/08/01-2004/01/12の期間、ロンドン大学大学院 (University College London, The Department of Phonetics & Linguistics) にて「一般音声学」および「英語音声学」の研究を行った際の研究成果といえる。Affiliate Academic (staff) としての待遇を受けた。最後に、この論叢の場を借りて、このような研究期間を私に与えてくださった聖学院大学の関係諸先生方に深く謝意を表する次第である。

### 注

- (1) 小池 滋 監修『イギリス』新潮社、1992年、pp.35-39.
- (2) Harte, N. and North, J. (1991) *The World of UCL 1828-1990*, University College London, London, p. 83, p.174.
- (3) 特別研究期間を次のように、7つの期間に区切って、研究に費やした。
  1. ロンドン大学大学院登録等、研究生生活開始準備期間 (2003/08/01-10)
 

8月4日には、本大学大学院における Affiliate Academic としての手続きを済ませ、次の夏期英語音声学研修講座に備えた。また、この期間、大学図書館および滞在先の London House の近隣にある大英図書館と大英博物館図書館などで言語学関係資料の収集を行った。
  2. ロンドン大学夏期英語音声学研修講座の受講 (2003/08/11-22)
 

ロンドン大学夏期英語音声学研修講座 (University College London Summer Course in English Phonetics) は、上記の Wells 教授が中心となって毎年行われている、全52時間にわたる講座で、授業は連日午前9時から午後4時 (あるいは5時) までである。これは、実質、ロンドン大学の授業そのものと言ってよい。興味深い点は、日本やアメリカの授業には無いチュートリアルの授業を体験できたことである。形式的にはゼミに近いが、もっと実用的側面を重んじている。即ち、各レクチャー終了直後にチュートリアルがあり、レクチャーの中で不明な点を即座に氷解させる意味があり、これほど効率の良い合理的な授業形態は他に無いように思われた。また、本研修講座によってイギリス英語 (特に、RP) のほぼ全容を把握する事ができた。この期間、ロンドン大学の音声・言語学学部が推薦し、提供する、調音音声学に関する書籍・CD-ROM・カセットなどを入手した。更に音響音声学に関する画期的なコンピュータ・ソフト (WASP) も入手することができた。尚、Wells 教授から出席証明書 (ATTENDANCE CERTIFICATE) を頂いた。
  3. 英語学・英文学関連地域の实地踏査研究 (2003/08/23-09/28)
 

英国各地を踏査する際、Dr Johnson などの英語学者関連地域以外に考慮したことは、私の副専攻 (minor) である「英文学」、特に Shakespeare, Chaucer, Wordsworth, Dickens などの偉大なる英文学者の関連地域も対象とした点である。具体的踏査地域名は、Stratford-upon-Avon, Canterbury, Windermere, Oxford, Cambridge, Edinburgh などである。中でも、特に印象深いのは、Shakespeare の生家で、彼が生まれた当時のまま家が残されていることに強い感銘を受け、欧米文学の歴史の源泉に触れた思いがした。家の中は、17世紀当時の生活状況が再現されている。案内人の説明の中で、Dickens による「家の保存運動」が無かったら、Shakespeare の生家は、アメリカに移譲されていたかもしれないという話が印象的であった。
  4. 大学院における、一般音声学講義及びチュートリアルの聴講 (2003/09/29-12/11)
 

日本では受講が困難な「一般音声学」の講義を聴講した。音声学会の国際的最高権威機関である The International Phonetic Association (IPA) の現会長は、上記の Wells 教授である。Wells 教授および Ashby 教授の音声学の講義を聴講した。聴講科目名は Practical Phonetics (English), English Accents, Phonological Analysis, General Phonetics Tutorial, Practical Phonetics (general) の5科目である。これによりイギリス音声のみならず、IPAの音声記号にも習熟し、かつ発音できるようになった。

## 比較調音音声学から見たイギリス英語の音声的特徴

また、全科目受講終了後、Wells教授 (IPA 会長、日本英語音声学会理事) の快諾が得られたので、IPA の会員になる申し込み手続きを行った。現在、IPA の会員である。

### 5. フランス言語・文化研究 (2003/12/12-17)

フランスの Paris と Lourdes を訪れ、欧米文化の深淵に触れると同時に、ロンドン大学大学院で学んだ音声学の理論を応用し、日常会話における実践を試みた。この実践を通じ、フランス語の音声体系についても、一般音声学が単なる一論理に止まらない実用性の高い学問であることを再認識することができた。

### 6. 一般言語学 (比較統語論) の深化 (2003/12/18-2004/01/12)

社会的趨勢として、現代の言語学は、Noam Chomsky の主張する Government & Binding や Universal Grammar に代表されるように、「理論言語学」の方に傾いている。その中でも、一般言語学に関する比較的新しい傾向である、Ian Roberts や William Croft などの理論を研究した。

### 7. EPSJ (日本英語音声学会) 編纂「英語音声学活用辞典」の分担執筆 (2004/01/13-31)

帰国後は、EPSJ に依頼された辞書の分担学術項目の執筆に専念した。

尚、次の住所に滞在した。David Copperfield Suite, London House building, Mecklenburgh Sq, London WC1N2AB UK。ご存知の通り、David Copperfield と言えば、ディケンズの作品の一つである。近所にディケンズが居住し、作品を執筆していた家屋がある。シェークスピアを始め、つくづくイギリスという国は、文学と深い関わりがある国であることを実感した。

以上、当初、予定していた計画のほぼ凡てを実行できたと実感している。寧ろ、予定以上の成果が得られたようにさえ思われる。

### (4) Wells, J. C. (1998) *Accents of English 1-3*, Cambridge University Press, Cambridge.

本文の大半は、上記の書籍以外、ロンドン大学大学院で研究したことを基にして記述した。

### (5) 御園 和夫『演習・英語音声学』和広出版、1994年、p.33。GAS は、長音を示差の特徴とは看做さないと出ているが、これは真実であろうか。今後の調査対象の一つとしたい。

### (6) ここで用いた記号名は、すべて次の書による。Pullum, G. K. and Ladusaw, William A. (1996) *Phonetic Symbol Guide*, The University of Chicago Press, Chicago and London.

### (7) 加曾利 実「現代英語音声学上の問題点」女子聖学院短期大学紀要 第23号、1991年、p.35。

### (8) 御園 和夫『演習・英語音声学』和広出版、1994年、p.7-8。

### (9) 加曾利 実、同上、1991年、pp.28-30。

### (10) Jones, D. (1960) *An Outline of English Phonetics*, W. Heffer & Sons LTD., Cambridge, p.185.

### (11) Ladefoged, P. and Maddieson, I. (2002) *The Sounds of the World's Languages*, Blackwell Publishing Ltd, Oxford UK & Cambridge USA, pp. 215-245。Rhotics ( r のこと) の研究に関して、本書以上に優れたものを見たことがない。

### (12) 石黒 昭博編『世界の英語小事典』研究出版、1992年。

### (13) 驚いたことに、カナダ英語の音声は、アメリカ英語と殆ど同じといってよい。しかし、この二カ国以外の英語は、イギリス英語を基盤として出来たものである。これは、過去この国々が英国の植民地であったことと密接な関係があると推測できる。

### (14) Crystal, D. (1990) *The English Language*, Penguin Books Ltd, England, pp. 358-359.

## 参考文献

### 洋書

Crystal, D. (1980) *A First Dictionary of Linguistics and Phonetics*, Andre Deutsch.

----- (1990) *The English Language*, Penguin Books Ltd, England.

Denes, P. B. and Pinson, E.N. (1993) *The Speech Chain*, W. H. Freeman and Company, New York.

Gimson, A. C. (revised by Alan Cruttenden) (2001) *Gimson's Pronunciation of English*, Arnold, London.

Harte, N. and North, J. (1991) *The World of UCL 1828 - 1990*, University College London, London.

Jones, D. (1960) *An Outline of English Phonetics*, W. Heffer & Sons LTD., Cambridge.

- (1987) *The Pronunciation of English*, Cambridge University Press, Cambridge.  
 Kohmoto, S. (1975) *New English Phonology - A Contrastive Study of English and Japanese Pronunciation*, Nan'un-Do, Tokyo.  
 Ladefoged, P. (1996) *Elements of Acoustic Phonetics*, The University of Chicago Press, Chicago.  
 Ladefoged, P. and Maddieson, I. (2002) *The Sounds of the World's Languages*, Blackwell Publishing Ltd, Oxford UK & Cambridge USA.  
 O'Connor, J.D. and Arnold, G.F. (1980) *Intonation of Colloquial English*, Longman, London.  
 Pullum, G. K. and Ladusaw, William A. (1996) *Phonetic Symbol Guide*, The University of Chicago Press, Chicago and London.  
 Roach, P. (2000) *English Phonetics and Phonology*, Cambridge University Press, Cambridge.  
 Wells, J. C. (1998) *Accents of English 1-3*, Cambridge University Press, Cambridge.  
 Wise, C. M. (1957) *Applied Phonetics*, Prentice-Hall, INC., Englewood Cliffs.

辞書

*Handbook of the International Phonetic Association* (2003) Cambridge University Press.

和書

- 石黒 昭博編 『世界の英語小事典』 研究出版，1992年。  
 小池 滋 監修 『イギリス』 新潮社，1992年。  
 御園 和夫 『演習・英語音声学』 和広出版，1994年。

URL

- <http://www.phon.ucl.ac.uk/> ( ロンドン大学音声学・言語学部のホームページ )  
<http://www.arts.gla.ac.uk/IPA/ipa.html> ( 国際音声学協会のホームページ )  
[http://homepage3.nifty.com/epsj\\_kanto/](http://homepage3.nifty.com/epsj_kanto/) ( 日本英語音声学会のホームページ )

英米音声記号対照表

( General American Speech & Received Pronunciation )

GAS	RP	例単語
<b>A. 母音 (Vowels)</b>		
1 a. [ i: ]	1 b. [ i: ]	pea
2 a. [ i ]	2 b. [ ɪ ]	pit
3 a. [ ε ]	3 b. [ e ]	pet
4 a. [ æ ]	4 b. [ æ ]	pat
5 a. [ ə ]	5 b. [ ə ]	soda
6 a. [ ʌ ]	6 b. [ ʌ ]	cut
7 a. [ ɑ: ]	7 b. [ ɑ: ]	pa
8 a. [ ɑ ]	8 b. [ ɒ ]	pot
9 a. [ u: ]	9 b. [ u: ]	too
10a. [ u ]	10b. [ ʊ ]	put
11a. [ ɔ: ]	11b. [ ɔ: ]	paw
12a. [ ɔ ]	12b. [ ɔ ]	-----
13a. [ ə:r ]	13b. [ ə: ]	pearl
14a. [ ɑ:r ]	14b. [ ɑ: ]	car
15a. [ ɔ:r ]	15b. [ ɔ: ]	core

## B. 二重母音 (Diphthongs)

### 上昇二重母音

1 a. [ei]	1 b. [eɪ]	ray
2 a. [ai]	2 b. [aɪ]	light
3 a. [ɔi]	3 b. [ɔɪ]	boy
4 a. [au]	4 b. [aʊ]	cow
5 a. [ou]	5 b. [əʊ]	no

### 集中二重母音

6 a. [iə(r)]	6 b. [ɪə]	ear
7 a. [ɛə(r)]	7 b. [eə]	pear
8 a. [uə(r)]	8 b. [ʊə]	poor
9 a. [ɔə(r)]	9 b. [ɔ:]	shore

## C. 子音 (Consonants)

子音の音声記号については、特に英米両言語に差異はない。同一の記号を用いているので、記号と例単語のみ挙げておくことにする。

1. [p]	peach
2. [b]	best
3. [t]	tip
4. [d]	do
5. [k]	key
6. [g]	get
7. [f]	free
8. [v]	vest
9. [θ]	think
10. [ð]	they
11. [s]	sink
12. [z]	zoo
13. [ʃ]	shell
14. [ʒ]	measure
15. [h]	he
16. [r]	road
17. [tʃ]	church
18. [dʒ]	jump
19. [ts]	cats
20. [dz]	cards
21. [l]	load
22. [m]	map
23. [n]	nap
24. [ŋ]	sing
25. [j]	yes
26. [w]	weep